

中島敦「わが西遊記」論－『西遊記』との比較を通して－

黄翠娥*

要旨

『西遊記』の中の沙悟浄は三蔵法師の弟子の一人でありながら、悟空や八戒と比べれば、それほど注目されてこなかった。何故中島敦は「わが西遊記」でこのような目立たない人物を取り上げたのかという疑問を持たざるを得ない。本論文は沙悟浄の人物像をめぐる原作と中島の作との比較、また「わが西遊記」の内容の展開を探究するによって、主題を探究しようとするものである。

『西遊記』における沙悟浄の人物像は、苦行僧、調和者、人間関係の指導者、従順な弟子、知者、君子などのイメージである。中島敦「わが西遊記」における沙悟浄は以上のイメージとは大分異なり、個人の生の問題により関心を示し、悩みを持っている人物像として作られている。沙悟浄の心理的な変化を余すところなく描くことを通して、悟浄の精神的な成長を現す。

この作品の主な議題は、悟浄の精神的な成長のほかに、この作品を通して作者の精神の反映を徹底的に行うものである。また、弱者への弁護もこの作品からはっきりと見出すことができる。また、三蔵法師、悟空及び八戒という三つの渡世の方法はそれなりの意義があり、作者の理想的な人生パターンだと見なしてもよかろう。最後に、「わが西遊記」の中島敦文学の位置付けを論ずれば、「かめれおん日記」、「狼疾記」以来の自意識過剰の問題は、この「わが西遊記」にくると、大きく解放するようになり、後の「名人伝」、「李陵」、「弟子」などの行動者の誕生に大いに関わっている役目を演じているものだと言える。

キーワード：中島敦 沙悟浄 『わが西遊記』 孫悟空 三蔵法師

*輔仁大学日本語文学科 助教授

論中島敦的〈我的西遊記〉—從比較《西遊記》的觀點—

黃翠娥*

摘要

《西遊記》中的沙悟淨是三藏法師取經活動中的三人弟子當中的一位，也是功績缺乏，造形缺少特色的一位。其實只有他最懂師父的心意，也是一行中的人際關係調停者，也是最勤於幫助大家走過低潮期的人物，他所扮演的角色是當一位認真、默默輔佐一行人的角色。而中島敦的〈我的西遊記〉則專以沙悟淨為主角，將其描寫成一位為了尋找人生的終極意義而出門探訪專家，但是卻始終舉棋不定的苦惱人物。本論文將透過原作《西遊記》與中島敦的〈我的西遊記〉中的沙悟淨人物造形來探究〈我的西遊記〉的中心思想及其在中島敦文學中的位置。

〈我的西遊記〉中的沙悟淨在精神層面上有著高度的成長，雖然先行研究中多將其視為承接著早期作品以來的「過多自我意識」，以致缺乏行動力的人物形象。但是本論文透過沙悟淨一連串的追尋、思索等舉動而主張其生命雖然未獲得最後成果，但是化為行動，努力尋找出路，最後能夠有所了悟----除了清楚自己生命的問題，也從三藏法師身上找到人生最終極的意義，並且決定了實踐的方法---如此的追尋過程，不能不說獲致了精神上的成長。

這個作品的主要議題除了精神上的成長之外，還可以看到為弱者吶喊、辯護的意味。另外三藏法師、悟空及八戒三種人生也說明了中島敦長期以來所追尋的人生典範。最後論到本作品在中島敦文學世界裡的地位部分，自早期作品中所懷抱的「過多自我意識」的問題，到了〈我的西遊記〉，即出現曙光，這樣的轉變為〈名人伝〉、〈李陵〉、〈弟子〉等後期作品中的行動者的誕生提供了豐富的孕育土壤。

關鍵詞：中島敦 沙悟淨 『我的西遊記』 孫悟空 三藏法師

*輔仁大學日本語文學系 副教授

On “My *Journey to the West*” by Nakajima Atsushi

Tsui-o Huang*

Abstract

In the classic Chinese novel *Journey to the West*, Sha Wujing is one of the three disciples of the Buddhist monk Xuanzang, serving his master in his pilgrimage to obtain Buddhist religious texts. Compared with the other two disciples, Sha Wujing does not make much contribution and his appearance lacks of distinguishing characteristics. However, he is in fact the one who is close to his master and serves as the peacemaker of the group intervening whenever there is a problem regarding the interpersonal relationship. He plays the role of a silent assistant helping everyone going through their hard times. Nakajima Atsushi, in his “My *Journey to the West*,” makes Sha Wujing the protagonist and portrays him as a troubled character who goes in for a journey to seek experts in order to figure out the ultimate meaning of life but suffers from his own hesitation and indecisiveness. Juxtaposing *Journey to the West* and Nakajima’s *My Journey to the West* to explore the characterization of Sha Wujing, this paper aims to discuss the themes of “My *Journey to the West*” and tries to define the significance of this work in relation to the oeuvre of Nakajima.

Sha Wujing in “My *Journey to the West*” is a spiritually matured character, but many researchers find him to be “overly self-conscious”—a common feature found in Nakajima’s early works—and lacking of action. However, this paper argues that not only does Sha Wujing not lack of action but he also achieves self-realization. Through his

* Associate Professor, Department of Japanese Literature, Fu Jen Catholic University

journey, despite of no obvious outcome, Sha Wujing, searching and pondering, gets to recognize problems of his life and learns from Master Xuanzang about the meaning of life and how to practice it fully. Such a quest indeed leads him to a spiritual growth.

In addition to the topic about spiritual growth, the attempt of speaking for and defending the minority can also be found in the work. Moreover, Master Xuanzang, Sun Wukong, and Zhu Bajie, each representing a life or lifestyle, exemplify the model of life that Nakajima had been searching throughout his life. Nakajima is often criticized for the problem of over self-consciousness found in his works. Some change can be found starting from this work, “*My Journey to the West*.” Such a transformation is important and prepares himself for the creation of active characters in his later works, “The Biography of Famous People,” “Li Ling,” and “Disciples.”

Keywords : Nakajima Atsushi, Sha Wujing, My Journey to the West
Sun Wukong, Buddhist monk Xuanzang

中島敦「わが西遊記」論 — 『西遊記』との比較を通して—

黃翠娥

1. 始めに

「悟浄出世」と「悟浄歎異」の二編からなる「わが西遊記」は、昭和17年11月に第二創作集『南島譚』に初めて発表された。しかし、正確な完成年は様々に論議されてきている。「悟浄出世」は、昭和16年5月8日附の田中西二郎宛の葉書に、「西遊記（孫悟空や八戒の出てくる）を書いてみます、僕のファウストにする意気込みなり。どうして日本、支那の文學者は、此の材料に目をつけなかつたのかな？」¹とあり、また、南洋行きの直前の昭和16年6月に深田久彌氏の所を訪ねて「南洋へ行く前に書き上げようと思つて、西遊記（孫悟空や八戒の出てくる）は始めてみますが、一向にはかどりません」²と留守だった深田氏に書き残している。ここから推測すれば、昭和16年6月以降書かれたものではないかと思われる。しかし、原作の『西遊記』の筋にしたがえば、「悟浄出世」と「悟浄歎異」という順序になるが、脱稿時期は「悟浄歎異」の原稿の方の文末に「昭十四・一・十五」の記入があるため、「悟浄歎異」の方が先になると思われる。この日付けの信憑性については従来争点となっているところだが、この矛盾については、本小論は資料を詳しく検証した木村東吉氏の説³にしたがりたい。木村氏は「悟浄歎異」の浄書原稿末尾の日付けを作者が作品の構想を得た日としている。作者の

¹ 中島敦「わが西遊記」（『中島敦全集 第一巻』 P 569）。

² 同注1

³ 木村東吉「中島敦『弟子』論—行動者の限界とその救済」。木村氏は、「悟浄出世」の実質執筆を昭和14年末~15年初頭ごろ、「悟浄歎異」の草稿執筆を16年5・6月ごろであるとし、両編の最終脱稿期を17年夏であるとする。

文学的主題の展開のあり方をみれば、「悟浄出世」～「悟浄歎異」という順序で書かれたという木村氏の指摘が妥当であると筆者も思う。

さて、この「わが西遊記」は中国の『西遊記』の登場人物の一人である沙悟浄を中心に描いたものである。伊藤貴麿氏によると、日本において『西遊記』はすでに徳川時代に訳されているが、それは四分の一あまりの抄訳で、原作のあふれるようなユーモアや、しゃれや滑稽さの大部分は失われ、会話の多くも省略され、全体が説明的なものになっている。そしてダイジェストの少年向けのものは、いたずらに孫悟空の武勇伝、妖魔の変化くらべにすぎないものになっていると指摘されている⁴。近代以降には、幸田露伴の『真西遊記』、佐藤春夫の『西遊記』、武者小路実篤の『仏陀と孫悟空』、田中英光の『わが西遊記上・下』、巖谷小波の『少年西遊記』、西川満の『西遊記』…などがある⁵。しかし、以上の著作の中では中島敦の「わが西遊記」のみが沙悟浄を主人公にしている。

『西遊記』の中の主要人物は三蔵法師、孫悟空、猪八戒と沙悟浄の四人で、沙悟浄は三蔵法師の弟子の一人でありながら、悟空や八戒と比べれば、それほど注目されてこなかった。悟空のように三蔵法師を補佐し助ける優れた存在でもないし、八戒のようによく事件を起こす問題人物でもないからである。沙悟浄が何のために『西遊記』に存在しているかはほとんど不明のまま、あまり追究されてこなかったし、『西遊記』をモチーフにした他の作品でも扱われることは少なかった。したがって、何故中島敦はこのように目立たない人物を取り上げたのかという疑問を持たざるを得ない。本論文は沙悟浄の人物像をめぐる原作と中島の作との比較、また「わが西遊記」の内容の展開を探究することによって、主題を探究しようとするものである。

⁴ 伊藤貴麿『西遊記上・中・下』pp. 4-5

⁵ 資料の中では、鳥居久靖の「わが國に於ける西遊記の流行—書誌的に見たる—」、「再続・わが國に於ける西遊記の流行—『少年西遊記』書誌—」などがより詳しい。

論の展開上、本論に入る前に、『西遊記』についての従来の説、また『西遊記』の中の沙悟浄の人物像などを簡単に見ておこう。

2、『西遊記』及び沙悟浄

『西遊記』は中国の四大小説の一つであり、明代の「神魔小説」の代表作⁶ともされる。その作者については諸説があるが、明の中頃に生きた呉承恩だとする説が主流である。その原典である『西域記』から小説『西遊記』が成立するまでほぼ千年の歳月を過ぎており、本来は取经を描いた史実は、人口に膾炙する民間伝説になった。『西遊記』の主題については、清代までには道教（五行、天道の説明）、仏教（大乘仏教の宣伝）、儒教（修心正意の強調）の立場から解釈されており、所謂「証道説」と称されている。19世紀の末には西洋思想が入ったことから、『西遊記』は「科学小説」や「哲理小説」とも見なされるようになり、民国時代以後、政治環境の転変による「政治寓話」という説も登場する。人物造形から中国人のそれぞれ階級のイメージを語っているとする意見もあり、その他の、冒険精神・高い理想性に富む成長を描いた作品だと見る主張も出てくる⁷。ただ、このような様々な説の中では、一般の民衆の作品享受の仕方に近い批評は、むしろ胡適の「趣味説」⁸及び魯迅の「遊戯説」⁹などであろう。サブカルチャーにおいては、北京劇、皮影戲、郷土劇、絵本、絵画、彫刻、建築、映画、マンガ、アニメ、おもちゃ、切手など極めて多方面にさまざまな形で享受されており、民衆の中に溶け込んでいるという点では際立っていると見てよいだろう

⁶ 魯迅は『中國小説史略』の中の第十六篇、第十七篇にわたって、『西遊記』を「神魔小説」にしている（「第十六篇 明之神魔小説（上）」、「第十七篇 明之神魔小説（中）」 p p、159-175）。

⁷ 譚倫傑『百變大聖取经行』『少年西遊記』によれば、『西遊記』は孫悟空の成長物語を通して、向上的な人生を送るべきという社会的教育の目的を有しているとする。

⁸ 胡適「『西遊記』考証」 p 144。

⁹ 同注 6。 p 174。

う。

さて、ここで沙悟浄の性格の特異性を見出すために、他の三人と比較してみよう。まず三蔵法師についてであるが、天竺に経を取りに行くが、その出発点は宗教への篤い信仰心からではない。皇帝の命を受けての天竺までの取经の旅なので、経を取りに行くことに対して責任感をもってはいるが、意気地がなく、時には故郷を思い、またその道のりの長さから悲嘆に暮れることもある。また厚い慈悲の心をもっているものの、真偽を見極めることは得意ではなく、常に孫悟空の行いを誤解し、危機を招く。精神的にも弱く、妖怪に捕らえられた時には、孫悟空が助けに来てくれないものかと待ち続けるだけで、命を投げ出して何かを成し遂げるような勇気はない¹⁰。

対して、孫悟空はというと、行動的な性格で、楽観的で前向き、正直で私心がなく、悪を憎んでいる。だが、反面落ち着きがなく、また喧嘩好きで功名心が強すぎる点が欠点としてある。

猪八戒は西遊記の中でその人物造造型に最も成功した人物だと言える¹¹。猪八戒は、天竺へ向かう一行の中で、労働者的性質を発揮し、多くの力仕事を請け負っている。その本質は中国の農民の生活に基づいたもので、安定した生活、その生活の基盤となる田畑を望み、質素で平凡に生活を営んでいるものである。孫悟空が名誉を求めると反対に、現実を重んじ実利に走り、しかも楽をしてより多くの利益を得ようとする。このため、旅の一行の中では最もやる気のない者だと言える。だが、猪八戒という人物の存在こそがこの神魔小説を豊かにし、この小説に、より人間的な面を与えているので

¹⁰ 作品の構造から、三蔵法師の性格を論ずる説もあるが、例えば、鈴木陽一氏によれば、むしろこれはストーリーの展開にとっては必要な人物像であるとする。即ち、物語の展開の基本的とも言えるパターン—法師が危機に陥り、悟空たちがこれを救う—が先にあり、そこから三蔵の性格や言動が決定されていくという（「『西遊記』における人物形象の再検討」（一）—三蔵法師— p 142）。

¹¹ 鄭明姍『西遊記探源』 p 121

ある。

最後に沙悟浄についてだが、その原型は唐代の『大慈恩寺三蔵法師伝』において登場したものである。ここには、三蔵法師が八百里沙河を通るとき、疲れきり、起きあがれなくなったときに、身長が数丈あり武器を手にしている大神を夢見て、その大神の鼓舞で命を保ったという逸話が描かれている¹²。『大唐三蔵取経詩話』に出てくる悟浄は、人肉を好む妖怪として「深沙神」に変身し、二回も僧侶を食ったものにされている¹³。その後、書かれた『西遊記』の悟浄は、もとは玉皇大帝の捲簾大将であったのだが、蟠桃会で玻璃の杯を砕いたがために、玉帝から八百回鞭打たれ、下界に流されたことになっている。そして深沙河でたくさんの人を食い、また、九人の僧侶の髑髏を紐でつなげて首輪のようなおもちゃにするという、水の妖怪になっている。その後、観音菩薩が彼の頭をさすって戒を授け、流沙河にちなんで姓を沙とさだめ、悟浄という法名を授けられる。それ以降、悟浄が持っていた元来の残酷な性格が消えるのである。そして、三蔵法師、孫悟空と八戒の三人に出会い、首輪にしていた九つの髑髏を一つに繋ぎ、恵岸行者の持参した観音菩薩からもらった瓢箪と組み合わせて筏を作り、三人に河を渡らせ、悪事を行う水の妖怪の要素は消えていく¹⁴。

これらの流れを概観すると『大慈恩寺三蔵法師伝』に見られる護法の神から、『大唐三蔵取経詩話』では凶悪で残酷な人食い妖怪へと変化し、『西遊記』では、これまでの凶悪さから一転して、黙々と働く、温厚で善良な性格の持ち主になる。そして、つらい修行にも恨み言を言わない苦行僧のような存在になっていくのである。

『西遊記』のなかで、沙悟浄は天竺への旅に最後に加わる人物で

¹² 慧立 彦惊『大慈恩寺三蔵法師伝 卷一』 P17

¹³ 「大唐三蔵取経詩話 第八」 PP. 100-101

¹⁴ 流沙河では「ひろびろと流沙のながれ 洋々とそこひもみえず とりの毛のかるきも浮かべず 芦の花そこにぞながる」とあるように、全てのものが沈んでしまうため、筏のような舟でなければ、河を渡ることができないようである。

ある。能力から言えば猪八戒に及ばず、当然孫悟空とは比べ物にならない。際立った功労もない。馬を引く以外には、妖怪との戦いの中ではたいてい三蔵のそばで白馬や荷物を守り、三蔵に仕えているだけなのである。戦いの中でその力を見せたり共に戦ったりし、つらい目に遭うこともあるが、それは孫悟空や猪八戒のそれとは比較にならないほど少ない。沙悟浄の面白みに欠ける人物像は、これまで西遊記の登場人物の中では人物造型にし失敗していると多くの評論家に評されてきたが、悟浄が取り立てて特徴を持ったものとして描かれなかったことを単に人物造型の失敗だと片付けてよいものだろうか。ここで今一度『西遊記』の中の沙悟浄の人物像を検討してみたい。

まず、沙悟浄は贖罪の念が強く、無口な苦行僧のように三蔵法師一行についていく存在である。昔の自慢をよく口に威張り、妖怪に遭うと三蔵法師の教訓を忘れ、徹底的に全滅させようとする孫悟空、酒色に浸り、腕っぷしを見せつけようと、妖怪と戦い続けるが、一行の中で一番先に修業の旅を放棄し諦めることを唱えることも多い猪八戒、また修業の旅では困難にぶつかると、すぐに諦めるわけではないが、常に望郷の念に襲われている三蔵法師。このように自分の欲望や感情に振り回されている一行の中で、悟浄だけは始終贖罪を思い、法師の教えを強く守り、妖怪に遭ってもせいぜい打ち負かすだけで、殺すことはしない。また、どんな難しい状況に置かれても、ただ淡々と日々を送り、法師に大人しく追随している。そのような悟浄の性質を第四十章の「紅孩兒」に見られる次の章節はよく表しているだろう。

行者は、ふんぷんおこっていった。「おれたちは、もうここで、解散しようじゃねえか！」

すると、八戒はすぐ受けていった。

「そうだ、そうだ。西天へなんて、いつたどりつけるか、わかったものじゃねえ。」

これをきくと沙和尚は、びっくりして、全身をわなわなと

ふるわせていった。

「兄き、いったいなにをいうのだ！ 始めあって終りをまっとうせねば、人のわらいものとなるじゃないか。それに観音さまのお心づくしに対しても、すむめえ。」

そこで行者はいった。

「(前略) 賢弟に、そのように誠意があることがわかれば、おれは考えなおしてもいいが、いったい八戒、おまえはどう思う。」

「おれもさっきは、恥ずかしげもなくあんなことをいったが、ここんところは、沙和尚のことばを立てて、妖怪をたずね、師父を救い出しにいったらどうだろう。」

すると行者は、すっかりいかりをおさめて、よろこんでいった(呉 494)¹⁵。

ここでは沙悟浄は一見無作為のようではあるが、実はこの修業の旅での舵取りの役目を果たし、前向きな態度で目標を達成しようとする強い信念の持ち主なのである。孫悟空は利は求めないが名には拘り、八戒は逆に名誉よりも利を優先して考える状態に反して、悟浄は名利には一切拘りを持たない。孫悟空はよく怒り、三蔵法師はよく空腹を訴え、八戒は貪欲で怠惰であるが、沙悟浄だけはこうした身体的な感覚や感情を露にしないのである。

また一行の人間関係を調和させ、団結させる役目も演じている。三蔵法師、孫悟空と八戒の三人の間には時折衝突なども起きるが、これらは沙悟浄によって解消されるのである。三蔵法師が孫悟空のことを怒り、罰を施そうとすると、沙悟浄が悟空に代わって許しを乞う場面も少なくないし、愚かな八戒のこともさりげなくはあるが、身を挺して守っているのである。このように沙悟浄は、一見貧弱な人物像のようでありながら、実は正真正銘の苦行僧であり、なおか

¹⁵ テキストの呉承恩著『西遊記 上』からの引用(p 494)を、伊藤貴麿編訳の『西遊記 中』の訳文によって示した。(p p 143-144)。

つこの修業の一行の中の調整役であり、人間関係の指導者としての役割も担っているのである。このような性格は沙悟浄が『西遊記』では五行の概念の、四方の中央である「土」に属し、「中和」の作用を持っている¹⁶ことと関連しよう。「沙和尚」という名前からも悟浄の性質を見ることができる。「沙」とは土の一種であり、「和」には調節や協調といった意味、「尚」は処理や超越といった意味が含まれている。「和尚」とはまた「和を持って尚と為す」という意味を示し、天竺への旅の一行の四人の異なった個性の中で、個性のないのがまさに彼の個性なのである。沙悟浄は自らの不器用さを認め、目立とうともせず、また目立った失敗もしない。最後のここぞという時でなければ怒ることもなく、事件の後にはまたすぐにいつもの穏やかな性格に戻る。『西遊記』第八章において、観音の指示で九つの髑髏を一つに繋ぎ、筏を作って三人に河を渡らせたという逸話は、彼が経典を取りに行くこの旅の中でバランスを取る役目を持っていることを既に一行との出会いの時点で暗示しているのである¹⁷。このため沙悟浄自身は折り目正しい人物でなければならず、人間くさすぎてもならなかったのである。

また、悟浄の特徴に従順な性格がある。三蔵法師にせよ、孫悟空にせよ、八戒にせよ、誰かが何かをやりたいと言うと、沙悟浄はほとんどその場で「いいね」「そうしよう」などと肯定的な態度を示す。この沙悟浄の一声のおかげで、取经の旅は内輪もめが起こることが少ない。そして、悟浄の言葉は仲間の感情をなだめ癒す働きもしている。三蔵法師が悲しい時や、驚いた時にはほとんど沙悟浄が

¹⁶張静二『西遊記人物研究』（pp. 22-27）、鄭明姍『西遊記探源』（p. 127）を参照。『西遊記』では、性格がなよやかな三蔵法師は「水」、孫悟空はわがままで自負心があり、勇敢で恐れ知らず、せっかちで乱暴者であり「金、火」に属し、猪八戒は貪欲で愚かであることから「木」に属することがわかる。沙悟浄は「土」だが、「土」は五行の中央にあり、五行を調節し協調させる作用がある。特に鄭明姍の『西遊記探源』（p. 127）においては、沙悟浄のこの特質を詳しく分析されている。

¹⁷同注 11。 p. 127

優しい言葉をかけ、八戒が落ち込んだ時、孫悟空が怒っている時などもいろいろと説得したり慰めたりする。もちろん八戒をからかったりする時もあるが、一行の中での役割はおおむね補佐的な優しい母親的な存在としてある。

沙悟浄のもう一つの特徴として、彼と三蔵の関係に注目しなければなるまい。悟浄は智慧を持って、法師と対応しているのである。法師が孫悟空のことを怒って彼を追い出す場合には、助ける時もあるが、黙って法師の言葉に従う時も少なくない。これは彼の意志のなさや弱さを露呈しているというよりもむしろ悟浄の中に智慧があることを示しているのではなかろうか。何故なら、このような従順な対応は沙悟浄がよく法師の性格を分かっているからこそ出てくる反応だと思われるからである。怒りの中ではほとんど他人の意見を受けつけない法師であることを知っているため、黙っていて法師が気がすむのを待っている方が有利だと判断しているのである。例えば第七十二章では、ある家の前を通りかかった時、法師がふとしたことから托鉢しようと言い出すというエピソードがあるのだが、この時、孫悟空も八戒も反対しつづけるのに対し、沙悟浄は「いくら言っても無駄だぜ。法師の性格はこうなのだから、逆らう必要はないさ。怒らせれば、たとえ托鉢しても法師は口にしないよ。」（呉869）と二人を諭す。つまり三蔵法師の性格を沙悟浄は最もよく理解しているのであり、天竺への旅が無事に続けられるのは、三蔵法師の性格を把握し、他の二人との折り合いをつけてやっているこの沙悟浄が存在するからだと言っても過言ではないのである。

このような、功を争わないため、戦うことも少ないというイメージの沙悟浄であるが、報恩のためには武力にも屈しない面もある。第三十章の宝象国で王女百花羞が勝手に三蔵法師を逃がし、他の妖怪に責められている場面では、沙悟浄は王女が逃がしたことを知りながら、王女が法師を逃がしてくれた恩に報いるため自らを犠牲にすることも厭わない。これは法師と王女双方に対する報恩でもある。恩には必ず報おうとする性格は、中国社会ではあつてしかるべき心

持なのである。このような沙悟浄の存在は、作者が設定した中国社会が標榜する君子のあるべきイメージが付与されているといえよう。

3. 「わが西遊記」における悟浄像

以上述べてきたように、『西遊記』における沙悟浄の人物像は、苦行僧、調和者、人間関係の指導者、従順な弟子、知者、君子などのイメージを持つ。しかし、このようなイメージはもっぱら対人関係をめぐって現れたキャラクターだといえる。中島敦「わが西遊記」における沙悟浄は『西遊記』のイメージとは大分異なり、個人の生の問題により関心を示し、悩みを持っている人物像として作られている。

ここで、悟浄を論ずる前に、まずこれまでに論じられてきた、「わが西遊記」をめぐると問題点を纏めておこう。中島敦の原稿を受けた中央公論社出版部の杉森久英氏は「悟浄出世の方はやはり少し落ちますね、全篇に流れてゐる才氣（といつては失禮ですね、才ばかりでなく、つまり文學としてのよさのことですが）に變りはありませんが、この材料はやはりもつと鍊つた方がおもしろくなりさうに思ひます、一寸、羅列したといふ感じで、その點物足りなく思ひました。」¹⁸と言っている。その後、「悟浄出世」と「悟浄歎異」の関係をめぐると成立についての研究¹⁹、また、人物形象の視点から沙悟浄の「河童像」²⁰についての分析、自己救済の作だと見なしている説などがある²¹。無論、自意識過剰に視点を置くのは従来主に論じ

¹⁸ 「來簡抄」『中島敦全集 第三巻』 p749

¹⁹ 前述した木村東吉の観点のほかに、以下の資料も参考になる。沢田美代子「中島敦の世界—『わが西遊記』への過程—」(pp、69-4-74)。藤村猛「『わが西遊記』考」(pp、13-23)。杉岡歩美「『悟浄歎異』『悟浄出世』考—中島敦と〈南洋行〉—」(pp、61-71)。丸尾実子「『わが西遊記』の成立」(pp、35-46)などがある。

²⁰ 水尾綾子「テレビドラマ・アニメ・漫画による『西遊記』の受容と変化—三蔵法師と沙悟浄を中心として—」pp、90-110

²¹ 箕野聡子「中島敦『悟浄歎異』における〈救い〉」pp、9-20

られてきた問題点だといえる。特に、磯貝英夫の説は後者の代表的なものであろう。磯貝氏によれば、中島敦は、観念的な私小説「狼疾記」「かめれおん日記」を書いて過剰な自意識、形而上的思弁によって行動力を失った悲しい知識人像を自虐的に写し出した作家であり、そのいわゆる狼疾からどう脱却するかが、以後の彼の理念的命題の中軸になるとする。「わが西遊記」に言及する場合も、この作が「狼疾記」路線にダイレクトに乗ったものであると見る²²。

以上の説があるが、むしろここに取り上げる「悟浄出世」と「悟浄歎異」における沙悟浄の行動力の展開の状態にはこの作の成長があることを主張したいのである。

3.1 「悟浄出世」

悟浄は流沙河の河底に住んでいる妖怪である。九人の僧侶を食べた後、不安を感じ、自己呵責に陥り、生まれ変わることに懐疑心を持ち始め、自分は一体何者かと常に考え込んでいる。この「醜く・鈍く・馬鹿正直な・それでめて、自分の愚かな苦悩を隠さうともしない」(294)²³悟浄は治療を求めるために医者、賢者、占星師を訪問する。

まず、黒卵道人という高名な幻術大家のもとを訪ねた悟浄は、この道人に三ヶ月も仕えたが、黒卵道人の話の内容は、神変不可思議の法術や、敵を欺く教え、宝を手に入れようなどの現実的な話ばかりで、悟浄の求めるような無用の思索の話し相手にはならなかった。

次に沙虹隠士の所に訪れる。この老隠士にも三ヶ月仕えるが、ここでは深奥な哲学に触れることはできた。この老隠士によれば、世は全て空しいもので、この有為転変を乗り越えて不壊不動の境地に至るには、我を忘れ、物を忘れ、不死不生の境地に至らなければならないという。また、自分がいるからこそ世界が存在しているとい

²² 磯貝英夫「近代文学と説話文学」pp、321-322

²³ 以下の「わが西遊記」からの引用はすべて『中島敦全集 第一巻』（1989）筑摩書房に従うものである。

う説を唱える。ただ、このような個人の幸福とか不動心の確立などの教えは、結局悟浄が関心を寄せる自己、世界の究極の意味の追究に対する答えにはなっていない。

そして、三番目に座禅を組んだまま眠り続ける坐忘先生の所へ赴く。「時の長さを計る尺度が、それを感じる者の実際の感じ以外に無いことを知らぬ者は愚かぢや。（中略）時とはな、我々の頭の中の一つの装置ぢやわい。」（299）と言われ、悟浄は仕方がなくそこを去り、また新しい旅を続ける。

次に出会ったのは高貴な姿の青年である。「我々はみんな鐵鎖に繋がれた死刑囚だ。…時は迫つてゐるぞ。その短い間を、自己欺瞞と酩酊とに過さうとするのか？…我々の為し得るのは、只神を愛し己を憎むことだけだ。」（299-300）という青年の叱咤の言葉から、悟浄は火のような聖い矢が自分の魂に向かって放たれるのを感じながらも、自分の悩みには役に立たない薬だとも感じる。

青年の次に会うのは醜い乞食である。この、ものの形を超えて不生不死の境に入ったような男の話に対し、悟浄は、苦痛を忍んで無理に壮語しているのではないかと疑いを抱く。また男の醜さと膿の臭さに生理的な反発を感じ、悟浄はまた新しい旅に出発することになる。

今度は貪食と強力で有名な虻髯鮎子を訪ねる。ここでは「遠き慮のみすれば、必ず近き憂あり。」（302）という苛刻な現実とその精神を学ぶ。

次いで隣人愛の説教者の無腸公子の講習会に出る。そこでは慈悲忍辱を説きながら、平気で自分の子を捕らえて食った様子を見かけてしまうのだが、「俺の生活の何處に、あゝした本能的な没我的な瞬間があるか」（303）と悟浄はつくづく反省させられる。

無腸公子の後には、自然の秘鑰を探究している蒲衣子の庵室を訪れ、ここにまた一ヶ月ぐらい滞在する。悟浄はここでの静かな幸福に惹かれながら、自然詩人となって宇宙の調和を讃え、その最奥の生命に同化することを願う。しかし、蒲衣子の弟子の一人の少年が

その精神のあまりの純粹さのために水に溶けてしまったという事故を目の当たりにし、蒲衣子の所も離れることになる。

蒲衣子の次に、肉の楽しみを極めることを以って唯一の生活信条としている斑衣鰻婆という五百余才を経ていた女怪の所に来た。「徳とはね、たのしむことの出来る能力のことですよ。」(306)という言葉聞かされ、悟浄はなおも旅を続ける。

このようにして、五年近くもの間、賢人遍歴を重ねるが、悟浄は結局自分が少しも賢くなっていないことに気付く。さらに、ひどいことには自分でないような、訳の分からないものに成り果てたような気もする。昔は愚かであっても少なくとも今よりしっかりとしていたと感じられる。したがって、悟浄は思索による探索以外に、もっと直接的な答えがあるだろうと思ひ至り、女偶氏という仙人の所にやって来る。そこで悟浄は、思索だけでは泥沼に陥ってしまうのだと反省させられる。悟浄は、自分はやはり何一つ分かっていないと感じながらも、そのうち徐々に目に見えない変化が彼の中に生まれ、自分が今まで何のために迷い、さまよってきたのか少しずつ分かってくるようになるのである。

自分の考へ方の中にあつた卑しい功利的なものに氣付いた。嶮しい途を選んで苦しみ抜いた揚句に、さて結局救はれないとなつたら取り返しのつかない損だ、といふ氣持ちは知らず知らずの間に、自分の不決斷に作用してゐたのだ。(中略)自分は今迄自己の幸福を求めて來たのではなく、世界の意味を尋ねて來たと自分では思つてゐたが、それはとんでもない間違ひで、實は、さういふ變つた形式の下に、最も執念深く自己の幸福を探してゐたのだといふことが、悟浄に解りかけて來た。自分は、そんな世界の意味を云々する程大した生きものでないことを、渠は、卑下感を以てゞなく、安らかな満足感を以て感じるやうになつた(311)。

ここで、いつも失敗への危惧から努力を放棄していた自分に気づき、骨折損を厭わない所にまで昇華されていき、「試みるために全

力を擧げて試みよう」(312)と決するようになった。この中で、観音菩薩に出会って、「一切の思念を棄て、たゞたゞ身を働かすことによって自らを救はうと心掛けるがよい。」(314)と言われ、やっと、三蔵法師一行に出会って、水から出て人間と成ることができるのである。

悟浄は以上述べてきたように、洋の東西を問わず、さまざまな哲学に触れており、自分の人生を救える教えを探し求めていくが、ここでは感動する時もあるれば、皮肉に感じる時もある。また、個人の好き嫌いによって、相手を拒む時もある。いずれにしても、全ての教えは彼の生に対する迷いの直接的な解決にはならない。唯一の収穫と言え、その探求の中で、自分の悩みの本質が少しずつ分かるようになったことである。これによって、これからの解決の可能性も少しは見出せるようになっていく。確かに杉森久英氏が指摘するようにこの作品では、教えを「羅列した」嫌いが無いこともない。ただ、その「羅列」は消極的なものではなく、それなりの意味があるのではないだろうか。つまり、この長い遍歴からは、どんなに貴い哲学でも、自分で実生活の中で実行し答えを求めるのには及ばないこと、また、徒勞への危惧は人間の成長にとっては阻害になることなどを読み取ることが可能なのである。このような心境の変化は沙悟浄にとっては大きな発見であり、悟りだとも言えるだろう。この長い遍歴がなければ、また、自己発見を通して行動しよう決心することがなければ、後の観音菩薩のガイドにはたやすく随行しないのであろう。取経の一行に参加するという実際の行動を快く取るのも、前の失敗及び悟りがあったからこそできたのではなかろうか。逆に言えば、この長い遍歴はすべて行動力の現れだといえる。したがって、行動力の欠乏及び形而上的な思弁に止まるなどの説はどうかと思われてよかろう。

むろん、この人生の指導方針を求めた成果はまだ出来ていない。「悟浄出世」での悟りがその後どうなるのかは、次の「悟浄歎異」で描かれる実際の生活での実験を待たなければならないのである。

3.2 「悟浄歎異」－沙門悟浄の手記－

原典での悟浄は、自分の仲間については何の感想も述べないし、天竺への旅での自分の役目や人生の意味についても一切触れていない。しかし、中島敦の「悟浄歎異」の沙悟浄は、仲間だけではなく、自分の立場や役目などもこと細かに考える。

この手記に描かれた悟浄の調整役として能力、指導者などのイメージは、『西遊記』のそれとほぼ一致している。ただ「わが西遊記」では、特に沙悟浄の観測者の面を強調される。沙悟浄は自分については次のように述べている。「此の旅行に於ける俺の役割にしたつて、さうだ。平穩無事の時に悟空の行き過ぎを引き留め、毎日の八戒の怠惰を戒めること。それだけではないか。何も積極的な役割が無いのだ。俺みたいな者は、何時何處の世に生れても、結局は、調節者、忠告者、観測者にとゞまるのだらうか。決して行動者には成れないのだらうか？」(332) と思いをめぐらす悟浄。行動が伴わない自分を反省する。悟空が八戒に変化の術を練習させた時、八戒がどうしてもうまく出来ない様子を見て、悟浄はそばで吹き出したり、げらげら笑ったりしており、その場面を思い出して自分は実行者よりも観測者だと考える。そして、三蔵法師と悟空の二人の関係をそばでよく観察している自分にも気付く。悟空は三蔵法師の優れた点に何も気付かないので、法師を助けると弱きものへの憐愍だと自惚れているが、優者に対する本能的な畏敬、美と貴さへの憧憬が多分に加わっていることを悟空自らは知らない。一方、三蔵法師も自分の悟空に対する優越に気付かず、妖怪の手から救い出される度に、涙を流して悟空に感謝してばかりいる。実際は、どんな妖怪に食われようと、師の生命が絶えてしまうことはないのなのである。沙悟浄は二人の付き合い方をつぶさに観察し、このような二人は自分達の真の関係を知らずに、互いに敬愛し合っており、その生き方において、共に所与を必然と考え、必然を完全と感じていると思う。「わが西遊記」では沙悟浄のこのような優れた観測力及び分析力を特に強調しているのである。何故観測と分析の能力を強調しなければな

らないかと言え、それは沙悟浄のもともとの穏やかで慎重さのある知者の性格を現したいからである。また、一步進んでいえば、観測及び分析は行動力の一環にも属しており、人生の模範を的確に探し出すのに、必要な要素なのであろう。

いずれにしても、悟浄の「悟浄出世」では、実際の行動により、既成の知識に頼れないと一種の悟りを開いたが、「悟浄歎異」では、実際の生活に入り込んで、その中から自分の人生の模範になる相手を見習おうとする。

このような鋭い観測力、分析力を持っている沙悟浄は自分の人生の出口を探す中では、以下の三つの模範を見出すことになる。

まず、孫悟空である。この男は誰に対してよりも、先ず自分に対して嘘のつけない男であり、この男の中には激しい、豊かな情熱を持っており、そばにいと、こちらが何か豊かな自信に満ちてくるように感じると語る。さらに悟空の目には平凡で陳腐なものは何一つない。ほとんど毎日と言っていいほど、全てのことに對して溜息をついて賛嘆するのである。また、悟浄は悟空の芸の精神に気付いている。つまり悟空によれば、法術の修業とは自分の気持ちを純一無垢、且つ強烈なものに統一する法を学ぶことであるという。人間が何故うまく変化の術ができないかと言うと、それは人間には気にかかる事柄が多過ぎ、精神統一が至難なのである。だから、八戒に竜に変身する術の練習をさせる時、「龍に成り度いといふ氣持だけになつて、お前といふものが消えて了へばいんだ」(319)と教え込んだりする。即ち、純粹で没我的にならなければならない。これは、自意識に拘っている悟浄にとっては魅力的な思考ともいえよう。

また、悟空は邪気のない存在でありながら、強敵と戦うとなると別人のようになる。全身は圧倒的な力量感に満ち、如何なる困難をも喜んで迎える強靱な精神力を持っている。まったく壮んな・没我的な・灼熱した美しさの持ち主になる。行動する時には、悟空の眼には必要な途だけがはっきり浮かび上がり、他は一切見えない。一般の鈍感のものが未だ茫然として考えも纏まらない中に、悟空はも

う行動を始め、目的への最短の道に向かって歩き出しているのである。これは行動力の発揮というだけではなく、むしろその思慮や判断があまりにも渾然と、腕力行為の中に溶け込んでいることの表れである。また、悟空はどんな危険な状況に陥っても、ただ、今自分のしている仕事の成否を憂えるだけで、自分の命を惜しむことはしないし、決して自分の命のために悲鳴をあげはしない。この男は、また、「因襲も世間的な名聲も此の男の前には何の権威も無」いし（325）、経験によって得た教訓は彼の血液の中に吸収され、直ちに彼の精神及び肉体の一部と化してしまう。したがって、戦略上の同じ誤りを決して二度と繰り返さない。これは無意識の中に体験を完全に吸収する不思議な力を持っているからである。

以上述べたように、悟浄にとっては生を肯定し、自我を忘却すべきという芸の精神を持ち、さらに外的な要素に束縛されないという行動力に満ちた悟空は完璧な英雄である。あらゆることに懐疑的な悟浄は「自己に対して抱いている信頼が、生き生きと溢れてい」る悟空をひたむきに賛美し、原作の『西遊記』の中の欠点を一切問題視しない。例えば、前文の「因襲も世間的な名聲も此の男の前には何の権威も無い。」という表現は原作でのイメージとは正反対の見方である。

では沙悟浄にとって三蔵法師は見習う対象にもなりうるであろうか。原作では法師は意気地なしのイメージが強い。「悟浄歎異」では、三蔵法師は驚くほど弱く、変化の術ももとより知らず、自己防衛の本能がない。このような存在が何故三人の弟子を惹きつけることができたのであろうか。沙悟浄は、法師のあの弱さの中に見られるある悲劇的なものに惹かれたからだと考える。つまり内なる貴さが外の弱さに包まれている所に、法師の魅力があるのである。法師はなにか困難に遭うと、それを切り抜ける途を外に求めず、内に求める。つまり自分の心がそれに耐え得るように構えるのである。いっどこで窮死しても尚幸福であり得る心を、法師は既に作り上げている。だから、外に途を求める必要がないのである。悟浄は悟空と

法師の二人の生き方を次のように比較してみせる。

悟空には、嚇怒はあつても苦惱は無い。歡喜はあつても憂愁は無い。彼が單純の生を肯定できるのに何の不思議もない。三藏法師の場合はどうか？あの病身と、禦ぐことを知らない弱さと、常に妖怪共の迫害を受けてある日々とを以てして、なほ師父は怡しげに生を肯はれる。之は大したことではないか！（329）

即ち、單純の生を肯定する悟空も、弱者でありながら、なお上手に渡世できる三藏法師もそれぞれに悟淨を魅了する点があるのであるが、特に法師のイメージは中島の「狼疾記」のころから既に求めつつある人物像である。即ち相手に反撃する力がなくても、依然として、立派な世渡りが出来たという力が尊敬されるのである。

では八戒はどうであろうか。八戒は孫悟空の華やかさに圧倒され、すっかり影の薄らいだ存在である。だが悟淨は八戒を、この生を、この世を愛している人物として捉えている。辛いことがあっても、またそれを忘れさせてくれる・堪えられぬ楽しさのあるこの世が一番いいというのが八戒の人生の哲学なのである。したがって、「楽しむにも才能の要るものだなと俺は氣が付き、爾来、此の豚を輕蔑することを止めた。」（332）という結論に至る。無論、悟淨からみれば、八戒は享樂主義者であるだけではなく、修業上では戦々兢兢として薄氷を履むようなつらい思いをしている人物としても語られる。

孫悟空と三藏法師と八戒の三人の特色を分析したが、悟淨の前に提示された生き方をみると、行動力を出して單純の生を追求する生き方、弱弱しく見えながら内的な力によって充実した生を送る状態、また聖俗のことを頭に入れずに、人生を十分に楽しむことを人生の最高の目標にしている生き方という三つのものがあるといえよう。悟淨にとって、このような発見は自分の人生にどのように応用されていくのだろうか。

悟淨は「今の所、俺は孫行者からあらゆるものを学び取らねばな

らぬのだ。他の事を顧みてゐる暇は無い。三蔵法師の智慧や八戒の生き方は、孫行者を卒業してからのことだ。まだまだ俺は悟空から殆ど何ものをも學び取つてをりはせぬ。流沙河の水をでてから、一體どれ程進歩したか？依然たる呉下の舊阿蒙ではないのか。」(332)と反省し、もっと積極的に悟空に近付き、学ばなければならないのだと決心する。悟空は弱者の能力の程度がうまくつかめず、弱者の懷疑、躊躇、不安などにはまったく同情を向けない。従って今まで自分は悟空と一定の距離を保っていて彼の前にあまりボロを出さないようにしていた。ただ、「遠方から眺めて感嘆してゐるだけでは何にもならぬ」と悟浄は考える(333)。また、最終的な目標は「自由な行為」をする境地に達することである。即ちどうしてもそれをせずにはいられないものが内に熱して来て、自ずと外に現れる行為が心の中に生まれてくる状態になることである。悟空の闊達無碍の働きはまさにそれであり、そのため、もっと積極的に悟空に近付き、悟空のこのような「自由な行為」という境地に到達しようとするのである。

3.3 精神的な成長

原作の『西遊記』では、人間的な成長を遂げるのは四人のうち孫悟空ただ一人である。悟空は当初は残忍で、妖怪を相手にするとすべて殺し、性格は粗らしく、法師になにか言われるとすぐにどこかに行ってしまう。しかし火焰山での出来事の後には次第に落ち着き、性格も大きく変化して人に好かれるようになり、話し方もかなり柔らかくなる。しかし他の三人はあまり変っていない。八戒は相変わらず自分の利益に拘り、女色に興味をもち続けている。沙悟浄はもとより穏やかで調和者的な存在であるため、経を取った後でさえも一向に変わらない。もちろん三人とも人生の目的を実現させるために、様々な困難を克服し、ついに目標に達したという点から見れば、人間的に成長していないとは言えないだろう。沙悟浄にしても、もとは流沙河で人を食っていた妖怪であったのが、その後仏門に帰依

して改心し、僧を守って天竺に経典を取りに行くのであるから、これは当然、大きな変化と成長をしているといってもよいだろう。しかし精神的な面での成長については、確かに明確な描写はないのである。

この点において、中島敦の「わが西遊記」は原作とは異なり、沙悟浄の心理的な変化を余すところなく描くことを通して、悟浄の精神的な成長を現す。ここであえて「精神的な成長」という言葉を使うのは、即ち「成長」とは、一般的に、様々な冒険、努力をしてから、当初に設定した目標に達したり、近付いたりすることを指すものであり、ここに示した意味での「成長」という意味に従えば、「わが西遊記」における沙悟浄は行動力が欠乏しているため、これを一般的な意味での成長物語だと定めることは難しいからである。既に磯貝氏の「行動力の失ったかなしい知識人像」²⁴を見る考え方や木村氏の「悟浄は、単純な観察者の域を出ない」²⁵とする説も示されている。特に磯貝氏は、沙悟浄の寂しい中で法師の寝ている顔を覗きこむという最後の場面について、「悟空は、及びもつかない、すばらしい手本だが、しかし、究極の理想像とはいえないことに、やがての悟浄は気づく。そして、かれの目は、純粹精神の代表者ともいべき三蔵法師に向くのである。」²⁶と指摘しているのだが、この部分は以下のようにも読み解けるのではないだろうか。

前述したように、悟浄は様々な遍歴をした後、人生の模範を見出して、恐れながらも尊敬すべき相手にもっと近付こうという実践方法を見つけた。ただ、これはあくまでも実践方法を見つけることに止まる。それは沙悟浄が依然として「寂しい。何かひどく寂しい。」

²⁴ 同注 22。 p 321。

²⁵ 木村東吉「中島敦『弟子』論—行動者の限界とその救済」(pp. 55-56)によれば、司馬遷は悟浄より著しく成長している。また、悟浄が悟空の「自由な行為」を憧れるが、自身にはまだ「内に熟して来る」ものが自覚されていなかったという。

²⁶ 磯貝英夫「近代文学と説話文学」 p 322

(334) と感じているからである。即ち、この実践方法は素晴らしいであろうが、何のためにこの方法を使用し、行動するのか、という悟浄の不安の裏返しともいえよう。つまり賢者遍歴を通して一生懸命に追究し続けた「自己、及び世界の究極の意味」(297) なのではないのであろうか。夜中の星を見ながら、法師の澄んだ寂しげな目をふと思い出した沙悟浄であるが、

師父は何時も永遠を見てみられる。それから、その永遠と對比された地上のなべてのものの運命をもはつきりと見てをられる。何時かは来る滅亡の前に、それでも可憐に花開かうとする叡智や愛情や、さうした数々の善きものの上に、師父は絶えず凝乎と慙れみの眼差を注いでをられるのではなかろうか(334)。

と、法師の修業の道の本質をようやく深く分かるようになってきている。ここにくると、すでに単純な観察者の域を出て、目標及びそれに達する実践方法を的確に把握するようになったのであろう。それで、「隣に寝てをられる師父の顔を覗き込む。暫く其の安らかな寝顔を見、静かな寝息を聞いてある中に、俺は、心の奥に何かポツと点火されたやうなほの温かさを感じて来た」(334) というように、調和的な世界に浸るようになったのである。これから、なお厳しい現実にあたり続けるだろうが、さまざまな遍歴を経て、ここまで辿りついた沙悟浄には、もう前向きな態度しか残らないだろう。

最後に付け加えるならば、中島敦の文学の流れから「わが西遊記」の位置付けを論ずるなら、「かめれおん日記」、「狼疾記」以来の自意識過剰の問題は、この「わが西遊記」に至り、大きく解放され、後の「名人伝」、「李陵」、「弟子」などの行動者の誕生に大いに関わっているのではなかろうか。

4、終わりに

「わが西遊記」からは、以上述べたような「精神的な成長」の達

成のほかに、いくつかの重要な意味合いが読み取れるだろう。

中国の文献を借りて自己の人生観や文学観、歴史観などを現す日本の多くの作品と同じように、この中国古典に取材した「わが西遊記」も、作者の精神の反映を徹底的に行うものになる。

人物造型においても、『西遊記』の研究史ではそれほど追究されていない沙悟浄が、中島敦の「わが西遊記」においては自分の人生を真剣に考察し、その追究に尽力し、優れた観測力を持っている知者という、より深みのある、ユニークな人物として描かれている。

「わが西遊記」はあたかも原作の『西遊記』の平凡さを補うために存在しているような作であろう。ここで、作者が取り入れた手法はむしろ前述した作者自身の言葉の「僕のファウストにする意気込みなり」というように、ファウストに倣ったという可能性が大きいであろう。中島は「わが西遊記」の執筆において、ファウスト博士のように、既成知識に頼らず、自力で生きることの充実感を得ようとして、自分の魂を悪魔に売るまで、様々な冒険生活を始めたのである²⁷。無論、「わが西遊記」の沙悟浄はそのスケール及び達成度はファウストには及ばないであろうが、にもかかわらず、冒険精神を持って、深く体験してから、処世の方法を見出した点も軽んじられてはならないだろう。

また、この作は弱者にとっての生きるための理由付けにもなり、この点でも意義深い。『西遊記』での沙悟浄は平凡な存在であるが、「わが西遊記」ではその平凡な個性の裏に、一人の人間としては精一杯に人生を過ごしていることが強調されている。たとえ、強者に少しも認められないとしても。「悟空は、どう考へても餘り有難い朋輩とは言へない。(中略)自己の能力を標準にして他人にもそれを要求し、それが出来ないからとて怒りつけるのだから堪らない。彼は自分の才能の非凡さに就いての自覺が無いのだとも云へる」(333)というように、弱者は強者に追随しないのではなく、及び

²⁷ 「ファウスト」(『鷗外全集 第十二巻』)

つかないものであることだと強調する。同じく、三蔵法師の弱さについても、「悟浄歎異」では丁寧に描かれている。弱弱しい存在であっても自分の精神力に頼って立派に人生に対処することも可能だという主張をするのである。三蔵法師の人物像は原作の意気地なしの法師像とは大分相違しているため、作者の、弱者としての弁解だと解釈してもよかろう。また、原作ではほとんど笑いものとして作られている八戒も「わが西遊記」になると、その我が意のまま、楽しく生を送ることに夢中であるということには、それなりの才能があると高く評価されている。即ち、世間一般の定義下の強・弱の表面的な概念ではなく、むしろ、自分の生き方にどのように納得し満足できるかが作者の関心の的であろう。

最後に、中島文学では「わが西遊記」の中の三つの渡世の方法を提示したのはそれなりの意味を具しているものだといえよう。即ち、この三つの渡世の方法を通して、中島がどのような渡世方法を憧憬していたのかも推察するに難くないだろう。まず、生を肯定し、忘我的に行動力を出しているパターンを最優先に学び、この前向き的な態度で世を送り続ければ、法師のように内的な力だけに頼って、難関を乗り越えるようになることも可能になる。そして、最後に八戒のように世間の目を憚らずに、より自由自在に享楽世界に浸ることができるようになる、と中島は言いたかったのではないだろうか。このように知に絡みとられた人間が生きられるならば、自意識過剰の呪いから完全に解放されることも期待できるのだという中島の意識を感じることができるのである。

<テキスト>

1. 呉承恩作・伊藤貴麿編訳（1977）『西遊記上・中・下』岩波書店
2. 中島敦（1989）『中島敦全集 第一巻』筑摩書房
3. 呉承恩（1996）『西遊記上・下』山東文芸出版

<参考文献>

鳥居久靖（1955）「わが國に於ける西遊記の流行—書誌的に見たる

- 『天理大学学報』天理大学人文学会
- 沢田美代子（1962）「中島敦の世界—『わが西遊記』への過程—」
『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）第10巻』大阪府立大学
- 鳥居久靖（1969）「再続・わが國に於ける西遊記の流行—『少年西遊記』書誌—」『中文研究 第9号』天理大学中国学科研究室
- 森鷗外（1972）『鷗外全集 第十二巻』岩波書店
- 「大唐三蔵取経詩話 第八」（1981）『宋元平話五種』河洛図書
- 張静二（1984）『西遊記人物研究』学生書局
- 藤村猛（1985）「中島敦『わが西遊記』考」『安田女子大学紀要』
安田女子大学
- 磯貝英夫（1987）「近代文学と説話文学」『日本文学講座 3 神話・説話』大修館書店
- 中島敦（1989）「來簡抄」『中島敦全集 第三巻』筑摩書房
- 木村東吉（1989）「中島敦『弟子』論—行動者の限界とその救済—」
『国語と国文学』第六十六巻 東京大学国語国文学会
- 魯迅（1989）「中國小説史略」『魯迅全集 第三巻』唐山出版
- 譚倫傑（1990）『百變大聖取経行』萬卷樓圖書
- 箕野聡子（1996）「中島敦『悟浄歎異』における〈救い〉」『キリスト教文学研究 第十三号』日本キリスト文学会
- 丸尾実子（1998）「『わが西遊記』の成立」『成城文藝 第162号』
成城大学文芸学部
- 胡適（1998）「『西遊記』考証」『胡適文集 6』人民文学出版
- 慧立、彦惊（2000）『大慈恩寺三蔵法師伝 卷一』中華書局
- 水尾綾子（2002）「テレビドラマ・アニメ・漫画による『西遊記』
の受容と変化—三蔵法師と沙悟浄を中心として—」『玉藻 第三十八号』フェリス女学院大学国文学会
- 鄭明姍（2003）『西遊記探源』里仁書局
- 杉岡歩美（2004）「『悟浄歎異』『悟浄出世』考—中島敦と〈南洋行〉」
『同志社国文学 第六十号』同志社大学国文学会